

長期ビジョン（仮称）めざすまちの姿に係る論点整理（事務局案）について

1 論点整理（事務局案）の位置づけ

- ・ 長期ビジョン（仮称）は、時代に左右されない京都のまちの基軸、羅針盤となるものであり、また、今後の政策推進の拠り所となる必要がある。
- ・ 上記の役割を果たすためには、京都が何を大切にし、どのようなまちをめざすのかという座標軸（めざすまちの姿）を一定具体的に定める必要がある。それを導き出すために、これまでに頂戴した審議会委員の御意見や未来共創チーム会議からの提言、特設サイト等で集めた市民等の意見を踏まえ、下記のとおり7つの論点を設定した。
- ・ 各論点を基に、市民等や行政が取り組むべきことなどについて、自由な発想かつ、一定具体的なアイデアや考え方なども含め多様な御意見をいただきたい。
- ・ なお、設定した論点に足りない点があれば、併せて御意見をいただきたい。

2 論点

○論点 1 京都人の生き方や暮らし方をどう受け継いでいくのか

○論点 2 多様な文化との交流が生まれるまちとなるためには

○論点 3 これからの時代における地域のつながりとは（「居場所」と「出番」、行政の役割など）

○論点 4 まちを形作ってきた豊かな自然環境をどう受け継いでいくのか

○論点 5 学問、芸術・技芸をどう深めていくのか

○論点 6 普通の暮らし、普通の幸せを実感できる社会とは

○論点 7 災害や感染症等から立ち直るしなやかさをどう構築するのか

論点1 京都人の生き方や暮らし方をどう受け継いでいくのか

審議会委員の意見	未来共創チーム全員の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第3回審議会(12/10)> 【鈴鹿委員】 - 文化の面については、過去の歴史が新たな未来につながっていくという観点は興味深い。市民が持つ独特の美的感覚や暮らしの知恵などがある。「京都の誇り」は、個々が属している文化に誇りを持つことにもつながっていくと思うので、それが日常にあることを、分かりやすい形で提示されたい良い。 【曾我副会長】 - 生成AIは明らかに大きな分野になるのは間違いない、そういう状況において、教育を今のような在り方で継続したとき、25年後に仕事はあるのだろうかと思う。技術の進歩について、少し後ろ向きに記載されている気がする。しかし、<u>技術の進歩は止めようもないし、止めるべきでもないだろうし、それに対応することが必要</u>ではないだろうか。 - 経済もデジタル化を生かさなかつたら成長しない。京都のまちの問題に、大学卒業後に京都から流出してしまう問題があるが、生成AI等の技術は、大学や、学問を学んできた人間が、きちんとそれを生かせる仕事だ。そのため、デジタル化などについて、あまりネガティブなことばかりを書くよりは、そういうものが経済の中心になってくることが生かしつつ、それにどのように対応するのかを記載することが必要 - デジタル化が個人主義的傾向を強くしているというよりは、個別化された情報が取られていく時代。<u>個別化された情報が取られていく時代に対して、どのように対応するのか</u>という問題は大きいのではないかな。 【田中委員】 - デジタル化が個人主義的傾向を強化していると言い切るのは少し違うのではないかな。デジタル化も一つの要因ではあるだろうが、時代の流れや、核家族化、単身世帯の増加などの要因もあるため、それだけではないと思う。 【濱崎委員】 - 町家という暮らしの空間・時間の中から生まれた文化が、いわゆる「伝統文化」になっている。そういう意味で、この数十年で生活空間にどのような変化があり、どのような取組をみんなで一生懸命に頑張ってきてきたのか、また、これから私たちの暮らしは、どのように紡いでいくのかということを考えることに大きな意味がある。少し高尚に見えつつある「文化」との接点が、<u>暮らしの中にあり、現代においては、京都にいるからこそ体感できている部分がある</u>。だからこそ、<u>京都の人たちは、「文化」と日常との間をつなぎ、まだ次代へとつなぐ接点としての役割がある。</u> 【プラー委員】 - 京都人のプライドや、京都人の誇りなどを前面に出している。伝統を守っていくことに加え、<u>その人間的なつながりをとても大切にされる</u>という、<u>第三節の中に書かれていることは、とても良いことだ</u>。外国人にとっても、大好きな京都。京都が大好きな外国人は多く、その人たちがどうしたら暮らしやすくなるのかということ、を入れていただければ。 【堀場委員】 - 海外の文化を否定しているわけでも、敵対する趣旨でもない。よく理解することが大切で、盲目的になるべきではないということが、私が強調するスピリットである。事実、事業をしていても、そのスピリットに海外の人が惚れてくれる。やはり信念を持つ、動じない、<u>文化的自信を持っているということが基軸となっていることが重要</u>。 【松井委員】 - 伝統文化といわれている多くのものを手掛ける方々は、おそらく、それだけでは生活していけないが、伝統を守らなければという想いで一生懸命活動されて、そこから更に多様に派生して活動を広げていらっしゃる。<u>伝統文化の継承とは、技術だけではなく、理念や理想の継承なのだと感じた</u>。つまり、京都で守っていかなければならないものはそういった、理念や理想ということ。 【宗田会長】 - 誇りが内向きであった背景には、町並みが汚かったり、京都が混乱したりという過去もあったと思うが、それがかなり改善されて、素直に、<u>外部の人が京都はいいなと憧れてくれるようなまちになってきている</u>。今度は、それをいかしたうえで、京都が新しい公共を含む、人々の在り方に関してどういう提言ができるかという議論に発展させていくための手掛かりになる。 - 町家があるから京都は偉大なのではなく、今生きている人が、そこにある<u>伝統工芸を大切に、これまで大切にしている気持ち、スタンス、哲学、理念があるから、町家の住民もそれをつないでいこう、さらにそれを紡いでいこうという姿勢がある</u>。それが、京都らしいということ。 <u>世界のことを結構意識するのが京都人の特質で</u>、世界最先端の知見を持ち寄って、京都の景観政策、都市計画、福祉政策などに相対取り組んでいるので、まさに世界都市としての京都。	1 弱いつながりでもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく - 京都は、灰汁の強い奇人・変人が多いが、まちのひとは彼らを微笑ましく見ていて、それも人の関わりの1つとして捉えている。京都のまちの価値とは、そうした居住や、利害関係の有無を超えた人とのつながりや、それによって形成される<u>網の目の細かさ、その豊かさ</u>である。 2 京都市民に解釈・行動を委ねる“無計画さ”や“余白”も大切 - 京都は、人が有機的に結びつきをつくりだしてきたまち。だからこそ、今の課題とその解決方法に対する全員の合意が取りにくくなっている時代において、<u>計画という「ゴール」をデザインするのではなく、どうすれば多様な主体が動き出せるかという「スタート」をデザインすることが、重要な</u>のではないかな。 - ひとりひとりに解釈があり、一つのビジョンでだれもが納得する解釈を打ち出すことは難しい。<u>多様な価値観を認め合い、それを受け止めるだけの「余白」が、ビジョンから感じられると良い</u>のではないかな。 3 脱成長・脱競争の社会へ。ベストだけでなくベターも認める - 日本では人口が減少し、世界では資源の枯渇や資本主義の限界などが議論される今、<u>すべてを拡大・成長方向で考えるのではなく、場合によっては、ひとりひとりが豊かで幸せであるために、新しいものを付け加えていく発想ではなく、今あるものをどう活用するか、再配分するか、また現状をいかに楽しむかを考えることも必要</u>ではないかな。 <u>一元的な価値観(＝ベスト)にあわせるのではなく、高いよりも程よく、速いよりも丁寧に、完成よりも未完・終わりがなく、競うよりもそれぞれの時に混ざりあう、といった一元的ではない目線を持つことが、世界文化自由都市を宣言している京都のまちには必要</u>ではないかな。 5 超長期目線で考える - 京都は1000年を超える歴史があるまち。その歴史の分だけ、<u>過去の参照点がなくさんあるところが、他のまちにはない大きな強み</u>。未来は今と過去の積み重ねであり、1000年前から紡がれてきた京都独自の価値観に立ち戻ることが大切なのではないかな。	1 京都のどんなところが好きなのか - 古い街並み 新旧の建物が入り混じって、そうした人たちがなにかを始めたり、続けていけるあわいのようなものが残っている。 - 神社仏閣 神社仏閣というのは観光地ではなく、日々の中の相談、迷い、といった負の感情を吐き出しに行ける場所。 - 日常の風景 ゆったりと時間が流れるのが気に入っています！ 落ち着きます！ - 地元企業 何世代にもわたって通えるような利用できるようなお店や会社が、そこにあり続けることが、京都固有の経済圏を守り、文化を守り、地域を彩っていくと思う。 2 京都の抱えている課題とは - 観光と市民生活の共存 観光客と市民の相互利益を考慮した施策が必要。 - 新しい観光の在り方 多くの方々が訪れてくださっているのに、「消費的観光」で終わっているケースが多く、惜しいと思います。 - 伝統文化の保護 日本独自の景色と精神を後世の日本に残し受け継がせるという気持ちで薄れて来ているように思います。伝統文化の保護と革新が必要である。 3 京都の理想像とは - 観光客と住民の共存 観光客と住民が共存できる環境づくりが必要です。 海外からの観光客が京都の文化だけじゃなく、福祉や教育にも触れる観光のあり方が実現するようなコミュニティをつくりたい！ - 伝統文化の学びと継承 古きを大切に温めて、新しいことを受け入れて京都ならではの变化をする凛としてしなやかな柔軟性が必要です。 - 歴史的建造物の保護 京都の歴史的建造物を守ることは、私たちの文化を守ることに繋がると思う。 5 小中学生が考える将来の京都の理想像とは (1) 将来住みたいまち - 文化・伝統 歴史的な建造物が残っているかつ自由で先進的なまち

審議会委員の意見	未来共創チーム会議の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第4回審議会(2/3)> 【安保副会長】 ・ 未来共創チーム会議の意見のうち、「ベストではなくベター」ということは、様々な価値観の中で言われていることだが、ベストを求める競争が激しい中で、京都市のビジョンとして、その価値観でやっていこうとされている。どうしても一定の年齢になると、そう言って良いのだろうか、と思ってしまうのだが、若い世代は、<u>そうじゃないと京都らしさや市民が幸せで生きていけないという価値判断があるのか</u>、というところにすごさを感じた。 【小川委員】 ・ 未来共創チーム会議の意見を聞いたとき、基本的には共感はあるものの、革新的なデジタルネイティブならではのガツガツさはないと感じたが、<u>発想そのものが全く異なるイノベーションの在り方や未来の発展のさせ方があるのでは</u>と感じた。その意味で、責任感や主体性の概念自体が問い直されるべきだと思う。 【鈴鹿委員】 ・ 一人一人、自分サイズの幸せと1000年先を見ることは、一見すると相反するように見えるが、<u>自分たちの幸せを追求していくことが、結果的に1000年先につながると思うので、その部分を対立なものとして見るのではなく、日々のところを見て、そして1000年先を見る。未来共創チーム会議の意見にもあったように、地図を描くのではなくコンパスを標すということはそういうことではないか。来年どうしようとか、25年先をどうしようではなく、1000年先にこうしたいから、その中で柔軟な部分、余白を作るのが大事だ</u>と感じていた。 【ブラー委員】 ・ 来日したのはバブルが崩壊した頃。それまでずっと頑張って、経済的にも発展してきた日本だったが、そういうことではない、<u>ベストだけでないベターを認めることが、これからの日本社会にとても重要</u>。 【宗田会長】 ・ これまでの25年、あるいは50年、戦後の80年、京都は落ち着いてきた。<u>1000年先の超長期目線で考えられるほど豊かになってきた。脱成長と表現されるようなゆとりができてきた</u>。若い方が恵まれていると思っているかは別かもしれないが、その恵まれた環境をどう生かし、世界のために貢献できるか。決して京都だけが良ければ、ということではない。		

論点2 多様な文化との交流が生まれるまちとなるためには

審議会委員の意見	未来共創チーム全議の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第3回審議会(12/10)> 【榑田委員】 ・ どれだけデジタル化が進展しようとも、人間中心であり続けること、すなわち人と人との関係性をいかに充実させていくのかということ。そして、多様性を伴うような社会構造の変化。つまり、<u>多様な人々が、居心地がよいと思えるようなまちをどうやってつくっていくのか</u>ということ。 【堀場委員】 ・ 良い意味で外と馴染んでいく。外に対してアピールするということが重要であり、「京都市民は、京都は」とだけ言っていると、京都の中では良いが、特に日本の中で良くないと思う。むしろ、海外の人のほうが京都に対する誤解は少ない。 【宗田会長】 ・ デジタル化をどう捉えるかということは、いろいろ考えるべき時期にきている。新聞を読まなくなっている、活字を読まなくなっていると言御発言があったが、若い人とどうコミュニケーションするかということも考える必要があるだろう。このことは、長期ビジョンを、どう市民にお伝えしていくかという問題とも関わる。 ・ 東西だけではなく、北と南の関係も変わってほしいと思う。その時に交流するような何か規範的なものがあるとすれば、それは京都から生まれるかもしれないという可能性を秘めていると思う。 ・ 働き方の問題は、現在急速に見直されようとしており、京都のまちに暮らすことが、働き方を充実させるための大きな一歩になるかもしれないという京都らしさも追求していきたい。 <第4回審議会(2/3)> 【赤松委員】 ・ スタートをデザインすることは、大学のまち、芸術、創造的、クリエイティブをめざす人々を育てる、つまり、はっきりした出口が見えないことを学問として取り組もうとする人材を豊かに生み出すことに関わり、つながる部分である。 【榑田委員】 ・ 未来共創チーム会議の意見について、これからは人と人との共感を通じたコミュニケーションからなる、良質なコミュニティをどうやって作っていくかということが強調されていたと感じた。従来ではなくデジタルも使って弱い紐帯でつながる社会、そこにネットワークを作る。ここに関して、もう少し具体的に話を進めていかないと、そこで話が終わってしまうリスクがある。横のつながりを紐帯としてどうやって作っていくか。 【原委員】 ・ 京都に住んで、来て、働いて良かったと、全ての方が良かったと思うには、心に余裕を持っていたくことが必要。	1 弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく ・ 多層的なつながりのあるすべての方々とつながりの濃淡に応じた多様な関係性を創っていき、ビジョンの主体(0.1の権利/プライドを持つ市民)として捉えることで、京都を愛してもらうことにつながるのではないか。 2 京都市民に解釈・行動を委ねる“無計画さ”や“余白”も大切 ・ 京都は、人が有機的に結びつきをつくりだしてきたまち。だからこそ、今の課題とその解決方法に対する全員の合意が取りにくくなっている時代において、<u>計画というゴールをデザインするのではなく、どうすれば多様な主体が動き出せるかという「スタート」をデザインすることが、重要なのではないか。</u> ・ ひとりひとりに解釈があり、一つのビジョンでだれもが納得する解釈を打ち出すことは難しい。多様な価値観を認め合い、それを受け止めるだけの「余白」が、ビジョンから感じられると良いのではないか。 3 脱成長・脱競争の社会へ。ベストだけでなくベターも認める ・ 一元的な価値観(＝ベスト)にあわせるのではなく、高いよりも程よく、速いよりも丁寧に、完成よりも未完・終わりがなく、競うよりもそれぞれの時に混ざりあう、といった一元ではない目線を持つことが、世界文化自由都市を宣言している京都のまちには必要ではないか。	1 京都のどんなところが好きなのか ・ 豊かな個性と文化 ・ 物好きというか、偏りを許容するカルチャーが意外とあるのが京都らしさ。 ・ 鴨川 ・ 学生や家族連れ、子どもたち、楽器の練習から読書に訪れる人など、様々な人がデルタ周辺に集まってくる。 ・ 日常の風景 ・ 京都にはインディペンデントの空間が都市のなかにぼつぼつと広がっていて、自転車でぐるっと巡るのが良いところだと考えます。 2 京都の抱えている課題とは ・ コミュニティ形成 ・ 新しく来た方と元々住んでいた方の交流が難しい、少ない(お互いに持っているイメージが固定している)。 ・ 若者の定住 ・ 若者が戻ってきたと思える京都にしていきたいです！ 3 京都の理想像とは ・ 多様な人の交流 ・ お互い誰なのか、どこに所属しているのか、肩書があるのかないのか、情熱があるのか、何も関係なくそこにいることが許される雰囲気。 ・ 地域経済の活性化 ・ 観光客や文化活動を呼び込み、地域の活性化と経済発展を後押ししたい。 5 小中学生が考える将来の京都の理想像とは (1) 将来住みたいまち ・ コミュニティ・交流 ・ 楽しい わいわいしている街 ・ 差別がなく、どんな人でも幸せにすごせる京都 (2) 未来への願い ・ 夢・未来 ・ 自分が好きなことをしたい

論点3 これからの時代における地域のつながりとは「居場所」と「出番」、行政の役割など

審議会委員の意見	未来共創チーム全員の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第3回審議会(12/10)> 【安保副会長】 ・ 京都市民が、これは自分たちの未来を書かれていいるものである必要があると思う。昔でいう洛中の方や、それから洛外に住む方、社会で活動している方も、これは自分のことをいわれていると思えるようなものだ。 ・ 構造的に社会の周辺に張り付けられてしまっている人たちも多い。京都といえども、そういう社会の構造的な問題については、どうしても影響を受けざるを得ない。そういう方々にとっても、自分たちも市民であって、長期ビジョンの価値観を一緒に共有できる幅広いものであってほしい。 ・ どうしても大人しかイメージできないが、子どもも、教育されるだけの受け身ではなく、子どもは子どもの生活について主体的に参加できる、まだ社会で主流ではない若い人も参加できるなど、そういう京都の多層性の記載もあってほしい。そういうことができれば、私たちのビジョンという形で捉えることができ、子どもたちや若い人と話す時など、いろいろな場で活用できるものになる。 【綱田委員】 ・ 自分たちのまちは自分たちが一番責任を追っているのだという自治の概念をもう少し強く盛り込んでいたきたい。そして、ステークホルダーとしての行政、市民、そしてまちの個性になる企業。それぞれ立場が違う構成員がきちんと連携する、距離を縮めるという関係性が、長期ビジョンの中に現れると良い。 【杉田委員】 ・ 私の周りでも、例えば二拠点、もしくは多拠点という形で京都に関わりを持ち始める方や、海外から毎年京都を訪れる方もいらっしゃる。従来の考え方では、住民票があり、市民権があり、投票権があるというところで市民が定義されるのかもしれないが、ライフスタイルが多様化した今、様々な形で市民の在り方、京都への関わり方がある。 【曾我副会長】 ・ 政治、行政の側が抱えている問題として特に大きいと思うのは、今も既に現れている分断化や分極化が、今後も、さらに強まることだ。京都において、そういうものと無縁であり続けられるなどということはない。 ・ 人々がどのような形で公共的なものに対して関わっていくのか、その時に分極化してしまうのか、それともまとまっていけるのかという問題について、記載があっても良い。 【田中委員】 ・ 私は京都出身ではないので、過去、現在の情報量が少ないが、「みんなで作ってきたまちなのだ、後から住んでいる自分たちも、その一員になるのだ」というようなところは、理解しやすい。 ・ 京都出身で京都に住んでいる中高生が、第四章「京都のこれから」の部分を読んだ時に、学生たちがこれからどういうことができるだろうかと考えられるきっかけになる。また、京都のことをいいなと思っている人が長期ビジョンを読めば、自分がここに住んだり、京都に関わったりしたときに、ワクワクするような自分の未来があるなと思えるものになると、すごく良い。 【原委員】 ・ 京都の良さというか、住んでいるところの良さは、やはり住みやすさや働きやすさがあってこそだと思う。やはりコミュニティというか、いろいろな固まりが大事。 【福富委員】 ・ 歴史や過去の様々なものの積み重ねから今の暮らしがあるけれども、これから先、一人一人が周りのために何かをすることで次の社会が形成されていくのだとしたら、「私」という主体それぞれに責任があるということを示すことが必要。 【ブラー委員】 ・ 外国籍で長く日本に住んでいる人は、「国民」や「市民」という言葉に、自分が入れられているのか、入れられていないのが気になる。 「国民」ということになると、少し違和感があるが、「市民」という言葉になると、自分も含まれていると感じる。 【牧委員】 ・ 全て「私」が主体になるということは、災害から復興するにしても、安全・安心を確保するにしても、誰かがやってくれるのではなくて、「私」が何かしなければならぬということになり、最初は少し厳しいスタンスだと感じた。しかし、災害復興にせよ、安心・安全なまちづくりにせよ、一人一人が強くなり、きちんとやらなければ実現は難しい。無責任に社会はこうしなければいけないなどと言ってしまわないところに、厳しさも感じながらもかえって妥当なのではないか。 【松井委員】 ・ その場その場で、どうやって柔軟に対応していくのかということを考えながら、自分たちの責任を果たしていく、役割を果たしていくということが重要である。そうしたとき、基本的なビジョンがあれば、自分たちが何かやらなければいけない時に、目指す方向が明確であることで、将来何か大きな問題が起きた際にも、それを見返すことによって、自らの行動の規範とすることができる。 【宗田会長】 ・ コミュニティ防災とよくいうが、コミュニティが自分を守ってくれるのではなくて、自分がそのコミュニティを支え、守る側に立とうとすることによって、コミュニティの一員たり得るような、自立性こそ、いわゆる人間性を恢復することにもつながるということだと思う。	1 弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく ・ 京都は、灰汁の強い奇人・変人が多いが、まちのひとは彼らを微笑ましく見ていて、それとも人の関わりの1つとして捉えている。京都のまちの価値とは、そうした居住や、利害関係の有無を超えた人と人のつながりや、それによって形成される網の目の細かさ、その豊かさである。 ・ 多層的なつながりのあるすべての方々をつながりの濃淡に応じた多様な関係性を創っていく。ビジョンの主体(0.1の権利/プライドを持つ市民)として捉えることで、京都を愛してもらうことにつながるのではないか。 ・ 京都は自然との関わり方もユニークであるため、人だけでなく、動植物、機械やAIなどもつながりの対象の一つとして捉え、それらと一体となったまちづくりを模索しても良いのではないか。 2 京都市民に解釈・行動を委ねる“無計画さ”や“余白”も大切 ・ 京都は、人が有機的に結びつきをつくりだしてきたまち。だからこそ、今の課題とその解決方法に対する全員の合意が取りにくくなっている時代において、計画という「ゴール」をデザインするのではなく、どうすれば多様な主体が動き出せるかという「スタート」をデザインすることが、重要なのではないか。	1 京都のどんなところが好きなのか ・ 地域のつながり ・ 出会う人の多くが、知り合いを通じてどこかでつながっているところ ・ 住民自治 ・ 明治以来続いてきた学校中心のまちづくりへの情熱は、今の学区単位の住民自治組織に引き継がれているように感じます。 2 京都の抱えている課題とは ・ 市民参加 ・ 行政の役割には限界があるので、市民の努力によって、魅力を上げていくことが重要だと思います。 ・ 市民の声の反映 ・ 引き続き、形が変わってもこうした自由な意見を広く簡単に集められる体制を恒常的に作ってほしい。 3 京都の理想像とは ・ 地域コミュニティの強化 ・ 地域のつながりを強めることで、みんなが支え合える社会を作りたいです。 ・ 2050年の公共空間は今以上に「人と人との温もり」で溢れた温かい公共空間でいて欲しい。 ・ 市民参加型の政策決定 ・ 市政に継続的に意見を出したり、感謝を伝えることで、良い循環を促す。 5 小中学生が考える将来の京都の理想像とは (1) 将来住みたいまち ・ コミュニティ・交流 ・ コミュニティの場が多くあり、町全体でまとまりがある (2) 未来への願い ・ 平和・安全 ・ ウクライナやガザの紛争が解決してすべての国で楽しくオリンピックをしたい ・ 社会・コミュニティ ・ みんな笑顔であふれていて楽しく暮らしたい ・ 子供も大人も楽しく過ごせるような政策もしてほしい

審議会委員の意見	未来共創チーム会議の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第4回審議会(2/3)> 【安保副会長】 ・京都市は市民の生活を支える責任があるが、市民の生活は、すごく雑多である。雑多なところをきちんと支えられないと、市民の生活は続けられないところがある。 【小川委員】 ・ある種のハイコンテクスト性や曖昧性、空気感をもって全面的に再評価していくことで、様々なことが突破できるのではと強く感じた。というのも、自分の主体性をぶつけ合い、激しく意見を言い合うコミュニケーションが成功しているかという点、新たな争いを生んでおり、必ずしもそうでもない。静かなるコミュニケーション、ハイコンテクストなものがビジネスの世界でも評価されつつある。例えば、IT業界で成功している方々も、実はコミュニケーションが得意ではないなど。余白や間など、相手からの働きかけを呼び込むことや、新しいものを受け入れる隙間を持ちながら、察するコミュニケーションが新しい未来を拓く可能性なのではないか。 【耕田委員】 ・市長中心ではなく、いろんな階層の人が、いろいろなテーマに対して、意見、提案をして、それを市政に取り上げていけるような仕組みを何か作ると、他のまちには無いことができるのではないかと。 ・生涯、国のため、市のために貢献するのが生きがいを感じるには、すべて行政でやってしまうのではなく、市民の方が半分ボランティア、半分ワークという形でまちづくりに参加する。そういったことをもっともっとやっていったら、「0.1市民」という言葉、全ての人が市民意識を持つということが、まちづくりにつながっていくきっかけになるのではと思う。 【阪部委員】 ・私自身は住民票を置いたことはないが、大学は同志社大学で、この会場のすぐ近くで、懐かしさを感じた。そういった私のように、私の認識では自分は0.5市民くらいに感じているが、大学が京都だったとか、仕事で京都に関わっていたとか、そういった人たちも巻き込んで、自分事として何らかの形で関わりを作っていくということはずごくいいと思った。それが他にはない京都らしさにつながると思う。 【曾我副会長】 ・現時点でこうだと決めつけずに、今後もうずっと決めていく、対話していくという仕組みをどう作るのかが大事。広い意味での政治になるだろうが、いろんな対立や共通部分もある人達が、どういう形でこの京都の在り方を考えていけるのか、そういう仕組みを作っていくのかどうか。京都市という単位ではなく、もっと狭い単位で、そこにいろんな人たちが入っていく、市民参加の在り方。審議会のような形で選ばれた人たちではなくて、いろんな人が入って考えていくミニパブリックスのような場を設けていくのかということとセットで、オープンにして今後も考えていく。そこには対立もあるし、共通部分もある中で、どう方向性を見出していかという仕組みが必要になってくる。 【プラール委員】 ・一人一人のウェルビーイングは、個々が幸せであれば、全員が幸せになるということで好きな言葉である。 【宗田会長】 ・余白を残したけれど、余白に取り残された人がいることもある。なので、気を付けないといけない。新型コロナウイルス感染症が蔓延した時でも、すべての人に目を配る難しさがつくづく分かった。人のつながりや社会と家族の在り方を考えさせられた5年間。余白をいろんな意味で考える機会になる。 ・市民参加の仕組みについては、京都でも30年近く前に市民参加推進条例を制定して、基本計画策定に当たって100人委員会を設置するなど、わりと進んできた。市民として関わる以外にも、例えば、全国各地に散らばっている茶道や華道をされている方たちも、京都に定期的に来てくださっている。そういう方たちが膨大な数がいらっしや、京都とつながっていて、京都の文化を全国に広めていってくれている。そういう方たちは、京都との関わりが結構あり、京都の関係人口として、京都を支えてくれている部分も多い。その最たるものがお茶、お花、絵画、音楽などの芸術分野だったりする。		

論点4 まちを形作ってきた豊かな自然環境をどう受け継いでいくのか

審議会委員の意見	未来共創チーム全議の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第3回審議会(12/10)> 【堀場委員】 - やはり京都は本当に風情があって何とも言えない魅力があると感じる。しかし、長く京都に住んでいるとその魅力が分からない。だから、この何とも言えない魅力をどう引き継いでいくかということは、日本にとっても非常に大切だと思う。 【宗田会長】 - 自然とどう対峙するのか、どう関係を持つのかという大きなポイントを見直す機会が来ている。 - 都心の文化だけが尊いわけではなく、その京都の洛外の周辺の自然や農業などにも京都らしさがある。「田舎に京あり、京に田舎あり」という言い方をする。	1 弱いつながらもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく - 京都は自然との関わり方もユニークであるため、人だけでなく、動植物、機械やAIなどもつながりの対象の一つとして捉え、それらと一体となったまちづくりを模索しても良いのではないか。 5 超長期目線で考える - 京都は1000年を超える歴史があるまち。その歴史の分だけ、過去の参照点がたくさんあるところが、他のまちにはない大きな強み。未来は今と過去の積み重ねであり、1000年前から紡がれてきた京都独自の価値観に立ち戻ることが大切なのではないか。	1 京都のどんなところが好きなのか - 鴨川 平安京以降の京都形成にあって鴨川の景色の変遷と現在の様子は、京都らしい景観のひとつ。 - 京都を囲む山並み 京都はいわゆるザ・京都な都市部だけではなく、北部の山間地域あつての京都だと思います。 2 京都の抱えている課題とは - 自然環境 自然が暮らしも豊かにするということに気付ける場づくりを考え実践したい。 3 京都の理想像とは - 環境教育 私たちの子ども達、孫たち、ひ孫たちに、自然と調和した、静かな暮らしを残したい。 5 小中学生が考える将来の京都の理想像とは (1) 将来住みたいまち - 自然・環境 人間だけでなく、京都に住む全ての生き物が快適に共存できるまち (2) 未来への願い - 自然・環境 地球にも優しい環境で、古都京都の景観を損なわんと、どんどん発展していってほしい。

論点5 学問・芸術・技芸をどう深めていくのか

審議会委員の意見	未来共創チーム会議の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第3回審議会(12/10)> 【田中委員】 ・ キーワードとして少し少ないと感じたのは、子育てや教育、学びの多様化のようなところだ。<u>学びや教育が今後どのようにしていくのか</u>ということは、ぜひ盛り込んでほしい。産業の発展や経済の部分についても書かれていることが少ない。 <第4回審議会(2/3)> 【赤松委員】 ・ 公立や国立の美術館、企業のギャラリーも増えているので、大学での教育だけでなく、社会教育の様々な価値観を見て、新たな刺激を受けることや、社会の人たちが大学に入っていくことで学生たちが育てられる、刺激が受けられるような今までとは違う大学の在り方が生まれてくるのではないか。<u>生涯ずっと学び続けられるまちとしての京都は、今後もずっと魅力になるのではないか。</u> 【鈴鹿委員】 ・ 京都で育っている人は、小さいころからその世界に入っている。何となく心に染み渡っているところがある。それが全てではないので、そういう京都の心を、<u>どういう方法があるかわからないが、教育の面でできる</u>ということ、これから大事だと感じる。 【堀場委員】 ・ 仕事柄、7～8割が海外の仕事であり、働いている人も7割近くが外国人。そこで大事なのは、<u>知識もそうだがどれだけ知恵を持っているか、あるいはクリエイティビティというか、独創力を持っているかどうか</u>が勝負になってきている。日本が相対的に弱くなっているのは、「クイズ王」ばかり育てて、<u>いわゆる知恵を出す人を育てる教育になっていない。</u> ・ 海外の人をマネージして、なぜロイヤリティがついてくるのかと思うときには、一番感じるのは、自分が小中学校で、京都のまちや四季、山とか川とか含めて、我々が小さい頃はそういう良さを学校で習った時の感覚、いわゆるプライドを持っていると、彼らはそれに憧れを持ってくる、ついてくるということ。彼らを京都に連れてきたときには、単なるビジネスだけではなく、京都の食文化やお花、お茶、お寺など見るが、京都は総合力が圧倒的。フランスの経済界との会合で、私は日本側の議長だったが、フランス側の議長から「パリもフランスも京都には勝てない」と言わせたと喜んだ。<u>京都の多様性は非常に大きな価値がある</u>と思っている。しかし、<u>京都にいますという良さに意外と気付かない。</u><u>そういうことを系統立てて学んでいくことも大切。</u>特に小中学校の子どもたちに、<u>将来の京都を託していけるような教育をきっちりしていくことが大事ではないか。</u> 【宗田会長】 ・ <u>子どもたちに感じてもらって、体験してもらってということが重要になる。</u>それは、新しい教育に対する課題でもあり、世界と我々がどうコミュニケーションしていくかの問題提起でもある。	4 誰もが“育む・支える”まなざしを持つ ・ 世界の都市は、偉い人、教養のある人といったいわゆる社会的強者(≒男性的目線)により、“生産力”を重視して作られている。しかしながら、コロナ禍を通じて、<u>子育てや福祉をはじめ、さらには仕事など私たちの社会を構成する網の目を維持するために必要な「育む・支えるケア」を備えていることの重要性が明らかになった。</u> <u>そのためにもビジョンでは、特にこれからを生きる若者、子どもたちや弱い立場の人の視点も入れる必要があるのではないか。</u>	1 京都のどんなところが好きなのか ・ 教育環境 大学が多いことが文化的な環境を形成している。 2 京都の抱えている課題とは ・ 教育環境 学習時間の確保よりも、子どもが京都らしい豊かな生活文化に親しむ機会を増やすようにしてほしい。 3 京都の理想像とは ・ 多文化共生教育 観光客には京都の伝統的な文化を学べる体験型プログラムを提供し、地元住民にはコミュニティ 活動や多世代交流の場として活用してもらうのどうか。 ・ 生涯学習の推進 2050年の京都ではこの社会のあり方を率先して変えていく、「すべての世代が学び直せる生涯学習都市」として、年齢や背景を問わず、誰もが学び直しのできる生き方を実現させてほしいです。 5 小中学生が考える将来の京都の理想像とは (1) 将来住みたいまち ・ 学び・遊びの環境 小中高生が思いっきり遊べるところがあるまち (2) 未来への願い ・ 夢・未来 だれもが自信をもって「こうなりたい！これがいい！」と夢を宣言、したいことをしたいといえる環境が京都にありますように ・ 学び どんな人でも学校に行けるようにしてほしい

論点6 普通のくらし、普通の幸せを実感できる社会とは

審議会委員の意見	未来共創チーム全員の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第3回審議会(12/10)> 【阪部委員】 - 西洋的なDEIやこれまでの流れを踏まえたうえで、ダイバーシティという言葉やそういう項目として扱わずに、京都らしさのところで書いていこうという方針をお示しいただいたことに大変共感できる。日々、様々なLGBTQの課題に関わっている中で感じるのは、西洋的な価値観を特に前面に押し出し過ぎていて、社会が分断していたりするところが、京都らしさとあまり相いれない点。そういう意味で、「<u>人の在り方を尊重し合いながら</u>」のような表現は、<u>すこく優しく良い</u>。ただ一方で、可視化という意味では、もう少し踏み込んだ表現も何らか必要かと思っており、その辺りのバランスが難しい。 【鈴鹿委員】 - 子育て世代の目線からの意見であるが、「子ども」についての要素が薄いと感じている。やはり<u>未来を見据えたときに、「子ども」に関する内容をどこかに盛り込むべきではないか</u>。 【高屋委員】 - 福祉の世界は特にそうだが、人口減少が進む中で<u>支える側の高齢化が進行し、そうした人が一生懸命やっているのが現実なので、支え、盛り上げようと頑張っている市民の姿を、未来のビジョンに落とし込んでいただきたい</u>。 【福富委員】 「構造的暴力」に言及していただいていることは大変良い。暮らしづらさの背景には、社会構造の問題がある。ソーシャルワークの考え方は、社会構造自体に如何にアプローチしていくかが重要だといわれている。干渉と予防に尽力していった先、すなわち構造的なゆがみや、暴力が徐々になくなっていく先に安心がある。<u>普通に暮らせることが実は幸せで、それが私たちの、福祉の目指しているもの</u>。人や職業等によって様々な違いがあると思うが、まずそういうところから排除されずに、その人としてきちんと暮らしていけることを目指すという辺りまで書いていただきたい。 - ケアする中で癒やされるなどという相互作用的なものがあるので、<u>ケアする、されるという関係性の中に一体的な何かが起こっている</u>。 【牧委員】 - 何か大変な目に私が遭ったとしても、<u>一人きりで頑張るだけではなく、周りの助けも受けながら回復できるのだ</u>というようなニュアンスがもう少しあっても良い。 <第4回審議会(2/3)> 【安保副会長】 「ケア」については、高齢者もどんどん増えていくので、<u>高齢者にも必要。お互いに力のある人だけでなく、全ての方々が京都で暮らしを確立していくには、ケアの思想をいつも持っていないと厳しいことがよく分かった</u> 【福富委員】 - 我々、福祉の立場からすると、支えがないから弱く追い込まれてしまうと感じている。支えを作ることで、追い込まれる人を少なくする取組は必要だが、この先に素晴らしい社会システムができて、社会から排除される人がいなくなるというユートピアのような社会が作れるかというと、今後も新しい課題は起こり続けるだろうと思う。その時に、<u>ひとつのキーワードとして「余白」が出てきたが、これが大事になる可能性はある</u>。	2 京都市民に解釈・行動を委ねる、“無計画さ”や“余白”も大切 - ひとりひとりに解釈があり、一つのビジョンでだれもが納得する解釈を打ち出すことは難しい。<u>多様な価値観を認め合い、それを受け止めるだけの「余白」が、ビジョンから感じられると良いのではないか</u>。 4 誰もが“育む・支える”まなざしを持つ - 世界の都市は、偉い人、教養のある人といったいわゆる社会的強者(≒男性的目線)により、“生産力”を重視して作られている。しかしながら、コロナ禍を通じて、子育てや福祉をはじめ、さらには仕事など私たちの社会を構成する<u>網の目を維持するために必要な「育む・支えるケア」を備えていることの重要性が明らかになった</u>。	1 京都のどんなところが好きなのか - 見守り活動 - こどもたちの見守りの文化はステキだと思います。登下校時に地域の方が見守りしているのもいいですが、掃除しながら、水やりしながら、おかえりー。ただいまー。という挨拶が地域で交わされているのを見ると安心安全な街はこういうところから生まれるんだらうなーと思います。 2 京都の抱えている課題とは - 公共交通の利便性 - 子供連れや身体が不自由な市民の移動手段が限られている。 - 子育て支援 - 子育てをするようになってからは、通過交通のために子どもの手をずっと離せなかったり、子育てのしにくさを感じ、結局京都を離れました。 3 京都の理想像とは - 子育て支援 2050年の京都も子供が笑ってられるようになってほしい。 - 高齢者支援 - 高齢化社会になっていくので、お年寄りを支えるとともに、コミュニティの再構築を図りたい。 - 地域産業の振興 - 自然と産業と文化が「ケア」で繋がる経済が、市内に巡っている状況。 5 小中学生が考える将来の京都の理想像とは (1) 将来住みたいまち - コミュニティ・交流 - 差別がなくて、どんな人も幸せにすごせる京都 ・交通・移動 - 観光の方にも地元の人にも優しいバリアフリー ・健康・福祉 - 病気の時に、こどもでも病院代が払えるまち (2) 未来への願い - 平和・安全 - いじめのない社会 裏社会のない、詐欺などのものが少ない

論点7 災害や感染症等から立ち直るしなやかさをどう構築するのか

審議会委員の意見	未来共創チーム会議の議論まとめ 「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」	特設サイト等で集めた市民等からの意見
<第3回審議会(12/10)> 【鈴鹿委員】 ・「安心」や「安全」という要素が希薄である。当たり前のことかもしれないが、世界情勢などが変化してきている中で、「京都にはつながりがあるから、安心」ということは一つのキーワードになるのではないだろうか。ネットのつながりの中で交流が済んでしまうようになって、やはり京都は顔と顔を合わせる地元の関わりが強く、町内会なども残っている。自治も根付いており、他都市に比べてそれによる安心というものがあるのではないか。 <第4回審議会(2/3)> 【松井委員】 ・未来共創チーム会議の意見を読ませてもらって、「しなやかさ」とか、「人の強さ」、「生きる強さ」とか、「包容力」という言葉が浮かんできた。<u>いろんなことを乗り越えていく、守っていくために必要なことだ</u>と感じた。	5 超長期目線で考える 京都は1000年を超える歴史があるまち。その歴史の分だけ、過去の参照点がたくさんあるところが、他のまちにはない大きな強み。未来は今と過去の積み重ねであり、1000年前から紡がれてきた京都独自の価値観に立ち戻る大切なのではないか。	1 京都のどんなところが好きなのか - 地蔵盆 地域の安全と子どもたちの健全な育成を願う地蔵盆は、町内会みんなが力を合わせて準備・実施することで、住民同士の交流や協力が深まり、防犯や防災の観点でも重要な役割を果たしてきました。 2 京都の抱えている課題とは - 多様な開発のあり方 地元民も一生安心して暮らせる災害のない街づくりを期待しています。 3 京都の理想像とは - 防災対策 災害に強い京都。橋、河川、道路、ライフラインの耐震性強化。 5 小中学生が考える将来の京都の理想像とは (1) 将来住みたいまち - 安全・安心 私たちの街は、誰もが安心して暮らせるように、犯罪がない街を目指すべきです。 (2) 未来への願い - 平和・安全 地震や台風、津波などといった災害が起きた時に助けあえる